

祈るということ

塚 越 一 彦

奨励者紹介[つかごし・かずひこ]

同志社大学副学長

研究開発推進機構長

同志社大学理工学部教授

[研究テーマ]微小空間で見られる流体流れの不思議な世界

わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。

そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

(ヨハネの黙示録 21 章1—4節)

はじめに

ご紹介いただきました理工学部の塚越です。理工学部には10学科ありますが、その中の一つ「化学システム創成工学科」に所属しています。ランチタイム・チャペル・アワーで、話をさせていただくのは、今回が、2回目になります。よろしくお願いいたします。いささか前回と話が重なるところがあるかと思いますが、ご容赦いただきたくお願いいたします。

春、4月のこの時季でのランチタイム・チャペル・アワーということで、今日は、「逝去者追悼礼拝」になります。

まずは、ご存知のことかと思いますが、「逝去者追悼礼拝」が、この4月に執り行われることになりましたところから話を始めさせていただきます。痛ましい事故は、今から16年前に起こりました。

JR福知山線での脱線事故になります。2005年4月25日午前9時過ぎに起こりました。月曜日でした。私は、2講時の講義に向かう途中で、他の先生から、「大きな事故があったらしいです」と聞きました。それが私への第一報でした。107名の方が亡くなっておられます。その中には、同志社大学の女子学生さん3名が含まれていました。

2時間目の講義に出席する予定で電車に乗って、京田辺キャンパスに向かっていました。「同志社前駅」で降りて、新緑の中、坂道をのぼり、大学の正門を通過して、講義を受けるつもりでおられました。ごく普通の一日が待っていたはずでした。

その普通の一日が、一瞬の事故で消え去ってしまいました。事もあろうに、人生そのものまでもが、全て失われてしまいました。彼女らは、いつもの電車に乗って、この同志社大学京田辺キャンパスを目指して

いたのです。それがかなわなかった、その「思い」を推すると、16年たった今もいたたまれない気持ちになります。

また、JR福知山線の脱線事故から数日後の4月28日、福島県の磐越自動車道でバスが横転する事故が起きました。ここでも同志社大学の学生さんが一人亡くなっておられます。春の連休を直前にして、突然、降り掛かってきた事故でした。

2005年に起こったこの2つの事故の犠牲となった本学の学生さん4人を偲んで、毎年4月に追悼礼拝が行われるようになりました。その礼拝には、御遺族、友人を含めて多くの方々が出席され、故人を思い起こす大切な機会となりました。こうした経緯を踏まえつつ、2009年度からは、これまでの同志社大学の長い歴史において、志半ばにして在学中に亡くなった学生さん、そして在職中に亡くなった教職員の皆さんを含めて、ともに追悼する今日の「逝去者追悼礼拝」が執り行われることになりました。

「逝去者追悼礼拝」での祈り

今日、この日、お集まりいただいている皆様とともに、志半ばで亡くなった学生さんや教職員の皆さんの魂の平安を心からお祈り申し上げたいと思います。そして、「逝去者追悼礼拝」の機となりましたこのような悲しい事故が起らないよう私たちは、安全で安心な社会づくりに、皆で努めていかなければならないと思います。

一方、事故以外の病気等で、亡くなられた方も多くいらっしゃいます。重ねて、深く哀悼の意を表します。この礼拝を通して、誰しもが、命というものを改めて考える機会をいただいています。命について考えていくと、その終焉としての死は、避けて通ることはできない、誰しもが迎えることを再確認することになります。

この「逝去者追悼礼拝」は、故人を偲び、魂の平安をお祈りする場であるとともに、今、ここにお集まりの皆さんが、それぞれの生と死について考える機会を、神様に与えていただいている場でもあると思っています。

私は、宗教家でも思想家でもありません。しかし、生と死については、古代の昔から人々が考え、多くの著書にも述べられていることを知っています。そして、生物学的な立場ではなく、人として生きていく中で生と死については、はっきりとした答えのようなものはないのではと思っています。

「祈るということ」

実は、この生と死については、前回のチャペル・アワーでも述べさせていただきました。

今日のメッセージの題目は「祈るということ」とさせていただきます。生と死を、真正面から考えていきますと、それは人類の永遠のテーマとなっていきます。対して、「祈るということ」は、私たちが今できること、私たちが生を受けている間にできることになります。今日は、誰にでもできる「祈るということ」について、理系の一教員ではありますが、思うところを話させていただきます。

今、ここでは、これまでに亡くなられた多くの人たちの魂の平安を皆様とともにお祈りしています。今年、東日本大震災から10年が経ちました。報道番組等を通じて、多くの祈る人々の姿を見てきました。人は日々の生活の中で祈りを捧げ続けています。

この祈るという心の問題を、生物の行動から考えていいことなのか、疑問ではあります。しかしながら、

人以外に私は、祈りに通じる所作をしている生物を知りません。人間の価値観や見方からは判断できないことかもしれません。宗教家でも思想家でも、また生物学者でもない私の無知が言わしめるものかもしれませんが、人だけが「祈ること」ができる地球上の唯一の生物だと思っています。

「祈ること」は、誰にもできることです。自己を見つめ直すとき、何かを決断するとき、過ちを反省するときも、現状を思う全てのことに對して私たちは祈ります。また、将来への不安や焦り、踏み出す勇氣、将来の夢や希望を思うとき、そのような全ての未来に思いを馳せたときも、自然と祈る気持ちに繋がっています。さらに、過去を思うとき、亡くなった人を偲ぶとき、過去を悔いるとき、友を懐かしく思うとき、すべての過去への思いを祈ることへ導いていきます。現在、未来、過去において、祈りが通じます。また、祈ることによって、現在、未来、過去が一つに繋がっていきます。そして、祈ることができるのは、今、生きているこのとき、現在だけであります。

日常の中での祈り

私自身、齢を重ねてきたこともあってか、場所や所作を問わず、祈る気持ちを大切にしたいと思っています。生きることと、祈り続けることは、同じような気がしています。人は、生き続ける限り、不安を覚え、悲しみに耐え、また、勇氣をふるって立ち上がり、優しく人を思い、過去の人を偲ぶ。全てが「祈ること」に繋がるような気がします。

祈ることは、進化の中で、人が人に近づく中、自然と身につけてきたものではないかと勝手に思っています。他の生物とは違って、人間が独自に備えてきたものでないでしょうか。宗教というかたちができあがる前から人が有していた特徴であり、ホモ・サピエンスの種を繋いできた原動力なのかもしれません。祈ること自体が、人としての証しと言えるのかもしれません。

一方、日々の生活が、自然環境から距離を置くようになって、急激に祈る機会が少なくなってきたようにも思います。祈ることの大切さ、あるいはそれは特別なことではなく、自然なことであり、物質文明が反映する中においても、祈るということをもう一度見つめ直す時期に来ているのかもしれません。

今、ここで、故人を偲びながら、改めて、祈ることの意味を問いかけられているようにも思います。日々の生活の中での祈り、祈りそのものが生活であり、人生であるように思えます。これは、私にとっては、宗教的な概念ではなく、一人の人間として、「祈ること」の大切さに思いが至っています。この奨励の機会を与えていただいたことを、皆さんと共に故人に祈りを捧げるときをいただいていることを、深く神に感謝しています。

新島先生の言葉に接して

新島先生は、多くの言葉を私たちに残してくれました。いくつか挙げさせてもらいます。

「諸君よ人一人は大切なり」

「進め進め好男児、決して退歩の策をなす勿れ」

「良心を手腕に運用するの人物を出ださんことを勉めたりき」

「諸君よ、もし理論をもって是非を判別せんと欲せば、決して難きにあらざるなり。然れども諸君よ、願わくばその理論に愛の油を注ぎ、もってこれを考えよ」

「人民の手に拠(よ)って設立する大学の、実になる感化を国民に及ぼすことを信ず」

これらの言葉は、時に、私たちを、勇気付け、励まし、また省みることを促してくれます。

新島先生の言葉には、それ自身に輝きがあり、温かさがあります。私は、大変僭越ではありますが、これらの言葉に、今、話をしてきましたように、場所や所作を問わず、祈るという心持ちを、内に向けるときであれ、外に対してであれ、また、現在、未来、過去に向けてであれ、心のどこかに祈るという心持ちを持ちながら、これらの言葉に向かい合っていきたいと思っています。そのことによって、より新島先生の教えに近づくことができるように思います。

「祈るということ」とは、どういうことなのか。抽象的な話はできても、私には定義はできません。しかし、誰にでもできることであり、また人にしかできないこと、そして人としてすべき最高の美しさを持ったものではないかと思っています。

最後になりますが、今日、皆さんとともに、祈る機会をいただいたことに心から感謝し、私の奨励とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

〔参考文献〕

森中章光 『片鱗集』 丁子屋書店 1950年

同志社編 『新島襄の手紙』 岩波書店 2005年

同志社編 『新島襄 教育宗教論集』 岩波書店 2010年

新島襄全集編集委員会編 『新島襄全集』I 同朋舎出版 1983年

2021年4月21日 京田辺水曜ランチタイム・チャペル・アワー「逝去者追悼礼拝奨励」記録